



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況
Author(s)	矢田, 俊隆; Yada, Toshitaka
Citation	スラヴ研究, 11, 81-102
Issue Date	1967
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/4987
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112889.pdf



アメリカ合衆国における ハプスブルク帝国史研究の近況

矢 田 俊 隆

序 言

最近のアメリカ合衆国の歴史学界にみられる一つの著しい特徴は、ハプスブルク帝国史の研究が非常にさかんなことである。いま試みに最近数年間の *Journal of Central European Affairs* (1964. 1 で中止), *Austrian History Yearbook*, *Journal of Modern History*, *American Historical Review*, *Slavonic and East European Review*, *American Slavic and East European Review*, *Slavic Review*, *Foreign Affairs*, *Journal of Economic History* などを開いてみれば、そこには、アメリカの学者によるおびただしい数の論文が見いだされるし、また、最近アメリカ人によって出版されたこの方面の著書の数も、けっして少なくはない。さらに昨年(1966)4月アメリカ合衆国のインディアナ大学で“19世紀のハプスブルク帝国における民族問題”をテーマにした国際的な研究会議が開かれたことも、それ自体、現在のアメリカにおけるハプスブルク帝国史への関心の高さを示すものといえることができる。

では、いったいつごろから、アメリカのハプスブルク帝国史研究はさかんになり始めたのであろうか。また、アメリカの学者はどのような分野と時代につよい関心をいだき、すぐれた成果を生みだしているのであろうか。この点を明らかにすることは、われわれ日本の歴史学者にとっても、非常に重要であり、有益であるといわざるをえない。もとよりこれはまことに困難な仕事であるが、前述のインディアナ会議の最終日に行なわれた Paul W. Schroeder (イリノイ大学教授) の“アメリカ合衆国におけるハプスブルク研究の状況”と題する報告は、要領よくまとめられ、示唆するところが多いので、ここではこの報告の内容を参考にしながら、その他若干の材料でこれを補いつつ、アメリカ学界の近況を伝えてみたいと思う。

なお最初にひとつ断っておかねばならないことがある。はじめの予定では、雑誌論文もすべて取りあげるつもりであったが、時間的な余裕がないのでこのたびは割愛し、ここでは、公刊された著書だけを考察の対象にしたいと思う。

アメリカにおけるハプスブルク帝国史研究の歴史をかえりみると、その出発点は1918年に求められるのが普通である。もちろん、それ以前の時期にもかなりの数の書物が出版されてはいるが、真の意味で学問的研究の名に値するもの、いまなお価値のあるものはほとんど見あたらないからである。したがって、本稿でも1917年以前の時期はこれをはぶき、第一次世界大戦の終わりから現在に至る50年間にアメリカの学者が生みだした成果を概観して、かれらがどのような領域でハプスブルク帝国史に貢献してきたか、またそれら

がどんな内容のものであったかを、明らかにしてみたい。

アメリカにおいて、ハプスブルク帝国史の学問的な研究が第一次世界大戦の終わりころにようやく始まったということは、なんら驚くべき事柄ではなく、同じことは、他の多くの歴史の分野についてもみられるところである。第一次大戦前における生産的な学問の不足は、その当時のアメリカの国際的孤立と、それに由来する世界の他の地域についての知識の欠如を反映していたと思われる。そのため、ヨーロッパにおけるこの分野の研究にはるかにおくれて、オーストリア＝ハンガリー帝国がその姿を消したのちにはじめて、アメリカのハプスブルク帝国史研究はその重要な第一歩をふみだしたというのが、実情であった。しかしその後50年間に、状況はまったく一変した。1920年代の初頭以来、一つにはアメリカ固有の発展のために、また一つには亡命学者によって与えられた大きな刺激によって、アメリカのハプスブルク帝国史研究はめざましい成長をとげ、とりわけ1940年以後は飛躍的な発展をとげるにいたった。そして世界の学界に、多くの貴重な業績をおくることになったのである。以下その実状を、六つの項目に分けて考察し、最後に、そこにみられる若干の特色や傾向を指摘してみたいと思う。

1) ハプスブルク帝国内の諸民族および諸地域のそれぞれについての一般史

このグループのなかでは、それほど著しい学問的進歩のあととはみられないが、ただひとつ重要な著作がある。それはチェコスロヴァキアについての

S. Harrison Thomson, *Czechoslovakia in European History* (1st ed., Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1943 ; 2nd ed., 1953)

で、著者は、中欧の多くの言語と文献に精通しているうえに、チェヒ人およびスロヴァキア人とながいのつきあいがある碩学で、この研究は学問的に堅実であり、見方も公平である。ただし、著者はチェヒ人やスロヴァキア人の問題、とくにチェヒ人の存立とかれらの自治にたいする熱望に深い共感をいだいているので、その意味ではチェヒ人びいきであるといえるが、そのためにこの書物は、人間的な興味という点でも読者を動かさずにはおかない。もちろん本書にも、他の学者から問題視されている点がないわけではない。たとえば、ベーメンのドイツ人の間の“大オーストリア思想”が軽視されているようにみえるし、またその後の研究の結果疑わしくなったもろもろの判断——特に1914年と1921年の間の時期について——もある。しかしそれにもかかわらず、この書物は数十年にわたる深い学殖から生まれた立派なもので、依然として、歴史研究のうえでのもっともすぐれた総合の一つであることは、疑いない。

しかし、このグループに属する他の書物については、同じことはいえない。それらは表面的であるか、傾向的であるか、またはその双方である。まずハンガリーについては、次のものがある。

Emil Lengyel, *One Thousand Years of Hungary* (New York : John Day, 1958)

は、学者ぶったところのない、たのしい通俗的な概観である。

Vámbéry Rusztem, *Hungary — To Be or Not To Be* (New York : Frederic Ungar,

1946)

は、小さなもので、ハンガリーのための誠実な弁明の試みであるが、深味はない。

George A. Birmingham, *A Wayfarer in Hungary* (New York : E. P. Dutton, 1925)

および

Louis Cornish, *Transylvania* (Philadelphia : Dorrance, 1947)

は、素朴な観察者の個人的印象を伝えているにすぎない。

次に、南スラヴ人関係のものに移ろう。

Ante Bonifačić and Clement S. Mihanović ed., *The Croatian Nation* (Chicago : "Croatia", 1955)

は、セルビア人およびユーゴスラヴ国にたいする、亡命者^{エミグレ}の長期にわたるはげしい論争を集めたもので、王党的な立場やチトー主義的な立場がみられる。

Francis R. Preveden, *A History of the Croatian People* (2 vols., New York : Philosophical Library, 1955-1962)

は、学問的な著作で、立派な美しい図版がはいっており、大体の方向は考古学的、文化史的である。年代が1683年にまでしか及んでいないので、ハプスブルク時代をほとんど含んでいない。

John A. Arnez, *Slovenia in European Affairs* (New York : League of CSA, 1958)

は、比較的学問的ではあるが、全体としてあまりにも偏見が多いので、読者を失望させる。著者は、19世紀にオーストリア政府がスロヴェニア文化を奨励したことを完全に無視して、スロヴェニア人は1千年間変ることなく計画的な“ドイツ化政策”に従えられてきた、と主張しているが、これはあまりにも単純にすぎるし、また1958年になってもなお「1914年以前のオーストリアの民族問題のための公正な解決方法は、まったく簡単であり、関係者すべてにとってためになるものであったらろう」と信じているのは、ばかげているというほかはない。

Thomas M. Barker, *The Slovenes of Carinthia* (Washington : Studia Slovenica, 1960)

は、Carinthiaのスロヴェニア人の問題を、その起源の時期から現在に至るまで注意深く概観したもので、スロヴェニア人の歴史一般を知るうえにも有益である。ハプスブルク帝国内の重要な少数民族問題を、冷静にとりあつかった、見事な研究である。

次に、やや広い地域をあつかったものをあげよう。

Andrew J. Burghardt, *Borderland* (Madison ; Wisconsin : University of Wisconsin Press, 1962)

は、ごく早い時期から現在に至るまでのドナウ中流地域全体の歴史を述べたもので、後半の数章では、西部ハンガリーおよび現在のブルゲンラントに主力を注いでいる。印象に残る学問的な研究であって、地理的な諸要素の影響を強調した野心的な仕事である。全体が均質であるとはいえないが、概括のさいの大胆さはほめるにたるものがあり、ある意味で非常に重要な著作である。ただ本書には、かなり議論の余地のある箇所が若干含まれており、また明らかに誤りと思われる箇所もみられる。たとえば、ハンガリーはオーストリ

アよりもその少数民族にたいして寛大であった(58ページ)という記事などは、これである。

Emil Lengyel, *The Danube* (New York : Random House, 1939)

は、ドナウ河流域の生活についての多彩な印象を述べているが、そこに含まれている歴史の部分は、浅薄である。

2) 1789年までのハプスブルク王国の歴史にかんする研究

このグループに属するものでは、すぐれた総合的成果とか、新分野を開発したような著作はないが、若干の立派な専門的研究がある。

Stephan Fischer-Galati, *Ottoman Imperialism and German Protestantism, 1521-1555* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1959)

は、東からのトルコ人の圧迫と西における宗教的な反抗が、ハプスブルク家の Karl V および Ferdinand I に与えた衝撃について叙述し、ハプスブルク家とトルコ人との間の争いが、Protestantism の生き続けるうえに果たした役割を描写している。この書物はしっかりした注意深い研究ではあるが、既存の知識に特になにか新しいものをつけ加えているわけではない。

Lewis W. Spitz, *Conrad Celtis, the German Arch-Humanist* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1957)

Lewis W. Spitz, *The Religious Renaissance of the German Humanists* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1963)

前者は、ドイツの人文主義者 Celtis の文筆的活動、その思想およびその及ぼした影響を取り扱った伝記であり、後者はいっそう幅のひろいテーマをあつかっているが、ともに立派な書物で、Maximilian I および Karl V の時代のオーストリアの知的・宗教的生活にふれている。

Gunther Rothenberg, *The Austrian Military Border in Croatia 1522-1747* (Urbana; Ill. : University of Illinois Press, 1960)

は、主として辺境管理についての詳細な歴史で、記録や文献の史料からたくさんの知識を引きだし、一冊の書物にまとめたものである。この書物は、国境守備兵(Grenzer)の組織とその維持について明らかにしているだけでなく、王国内の対外政策および国内政策の多くの問題にも光を投げている。国境守備兵にたいするハプスブルク家の政策について、著者の結論はまったく批判的である。本書の叙述によれば、ハプスブルク家の政策は、軍事植民地をすっかりないがしろにしたり、強制的に宗教上の改宗を行なわせようとしたり、またすべてにしみ通る温情主義的専制政治を導入しようとしたり、時代によってまちまちの不統一なものであった。

Robert J. Kerner, *Bohemia in the Eighteenth Century* (New York : Macmillan, 1932)

は、18世紀のベーメンにおけるハプスブルク家の支配を叙述したもので、興味をそそる

アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況

ようなものではないが、しっかりした、信頼のおける研究である。White Mountain の戦いのあと 1 世紀半の間のベーメンの政治的衰退を概観したのち、この書物は 1790—1792 年の時期のベーメンにおける皇帝 Leopold II と議会の間の政治上 = 国制上の争いの詳細な分析に、全力を集中している。Kerner は、基本的にはチェヒ人に同情をもっているけれども、議会の提案の多くのものが——特に農奴制や宗教的寛容の問題について——せまい、反動的な、階級性をおびていることを明らかにし、中世的なベーメン議会が、ハプスブルク家の絶対主義と同じように、近代的立憲政治にとっての大きな障害となったことを示している。そのなかで、慎重にしかもたくみに事を進めていった Leopold II の態度が、英雄的なものとして賞賛されている。

Edith Murr Link, *The Emancipation of the Austrian Peasant, 1740-1798* (New York : Columbia University Press, 1949)

は、18 世紀後半の農業上の改革にかんするしっかりした包括的な概観で、カメラリストの学説とオーストリア政府の農民政策に主力が注がれている。分析はそれほど深く立ちいって行なわれてはいないが、この研究はかなり高く評価すべきものである。著者にとっては、Joseph II は英雄であり、不完全ながらも農村に革命をうみだした人物である。これにたいして Leopold II と若年の Franz II は、Joseph の地租を廃止し、国家を農民階級の保護者たらしめるかわりに、まったく不平等な立場で対抗しあう二つの階級、貴族と農民の間の無力な調停者にふたたびしてしまったために、非難されている。

Herman Freudenberger, *The Waldstein Woolen Mill* (Boston : Baker Library, 1963)

は、経済史の領域での非常に興味深い、有益な著作である。かなりの数の文書史料をもとにして、18 世紀ベーメンの工業化の原因について一般的な解釈をくらすとともに、その過程、特に毛織物工業における若干の詳細なケース = スタディ (特例研究) を提供している。当時珍らしくも成功した貴族の企業についての記事は、特に面白い一例である。

Robert A. Kann, *Study in Austrian Intellectual History* (New York : Frederic A. Praeger, 1963)

は、オーストリアにおける二つの主要な時代と伝統——バロックと啓蒙——を代表するものとして、Abraham a Sancta Clara と Joseph von Sannenfels をとりあげ、バロックと啓蒙の代表的な観念と様式とを注意深く分析したものである。Kann はこれらの観念や様式を文化史の一般理論にたいする貢献であると考え、さらにオーストリアの文化発展について彼自身の一般理論——短い動的な時期と、いっそう長い安定の時期とが交代にやってくるという——を提供している。この書物の文体は、Kann の他の書物の場合よりもわかりにくく、時に読者をまごつかせることがあるが、しかし本書が読者に刺戟を与える重要な研究であることは、明白である。

Saul K. Padover, *The Revolutionary Emperor, Joseph II* (London : J. Cape, 1934)

は、アメリカ人の出版した伝記のなかで、年代的にまず最初に取りあげる価値のあるものといわれている。広範な読書と若干の文書にもとづく研究から生まれた、通俗的な伝記で、役には立つが、批判的なところはない。いくらか表面的で、Josephinism の革命的なまたイデオロギー的な源泉をかなり過大評価しており、しかも著者は自己の偏見を抑制し

ようとする努力をなんら示していない。

Walter C. Langsam, *Francis the Good : the Education of an Emperor, 1768-1792*
(New York : Macmillan, 1949)

は、文献とオーストリアの記録保管所での印象的な研究をもとにして、主として Franz II の個人生活と教育とを、細かに、そしてしばしば退屈に、くわしく叙述している。この書物は、長い間その必要が感じられ、出現を期待されていた、Franz II の行きとどいた学問的な伝記として、有益なものであるが、1792 年の Franz の即位をもって終わっており、全面的な伝記の第一巻ともいふべきものである。著者は、この書物の出現によって従来の Franz 像にかなりの改訂が加えられ、彼の復権をもたらすことができると信じているが、しかしここに描かれている Franz の肖像画が、在来のものでそれほどちがっているとは思われない。いずれにせよ、いつか全体の完成されることが望まれる。

3) 1789年から1848年に至る時期の研究

この時期については、外交史の研究が他のすべての分野を凌駕している。しかも、特に Metternich がアメリカの歴史家たちにとって魅惑的なテーマであったことが、知られる。

Josephine Bunch Stearn, *The Role of Metternich in undermining Napoleon* (Urbana, Ill. : University of Illinois Press, 1948)

は、浅薄で、こんにちではもはや時代おくれといってよい。

Enno Kraehe, *Metternich's German Policy, Vol. 1 : The Contest with Napoleon, 1794-1814* (Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1963)

は、1809—1814の時期の Metternich の現実的な外交政策について、きわめて明快な、満足のゆく妥当な説明を与えている。多くの新しい事実や材料をとりいれているわけではないが、もろもろの問題を、Metternich およびその同時代人たちがみだりに描くことに、成功している。著者の解釈によれば、Metternich は多くの重大な圧迫と危険のもとで巧みな退却を行なった見事な即興詩人だったのであって、なにかんづく彼は、たとえオーストリアが Napoleon に反して同盟諸国の陣営に転じなくてはならないにしても、オーストリアは自己の安全のために必要な独立したヨーロッパの中心部を犠牲にしてはならないと決心したのであった。Metternich の争いは主として Alexander I との間に行なわれたのであって、Napoleon との間に行なわれたのではなかった、という著者の指摘も、興味深い。

Hannah A. Straus, *The Attitude of the Congress of Vienna toward Nationalism in Germany, Italy and Poland* (New York : Columbia University Press, 1949)

Edward Vose Gulick, *Europe's Classical Balance of Power* (Ithaca, N. Y. : Cornell University Press, 1955)

Henry A. Kissinger, *A World Restored : Metternich, Castlereagh and the Problems of Peace, 1812-1822* (Boston, Mass. : Houghton-Mifflin, 1957)

の三つの著作は、ウィーン会議とその後の外交の諸側面をあつかったもので、いずれも

公刊された史料をもとにした、有益な研究であるが、独創性はみられない。

まず Straus は、ウィーン会議における民族問題をかなり有能に取りあつかってはいるが、深味はない。Nationalism にたいするオーストリアの反対についても、片断的な見解が与えられており、いわゆる Nationalism の諸問題のなかに含まれている複雑な権力政治的なまた社会的な対立関係を、深く立ちいってみていない。また、中欧の制御という立場でのオーストリアとロシアの Alexander I との争いの重要性を、認識していない。

Gulick はウィーン会議の前および会議の間のオーストリアの政策について、Kraehe とはちがった解釈を与えている。本書のなかで新しい材料はほとんど使われていないが、会議の前および会議の間の同盟諸国の外交のうちにあらわれているさまざまなレベルの“equilibrant”（つりあいをとる芸の得意な曲芸師）思想の分析において非常にすぐれており、権力政治のバランスはたんに最悪の場合を意味するだけではなく、綱わたり師的な思想と実践には、あいまいながら、無政府状態から alliance, coalition, confederation, federation に進行しようとするある種の傾向がある、ということを論じている点は、有益である。

Kissinger は、連合諸国の外交について、また革命的勢力と正統的勢力との間の戦略戦術における本質的な差異について、あざやかな、機知にとんだ洞察を示している。著者の主要な論旨は、Metternich ははじめからオーストリアのために同盟諸国の連合のリーダーシップを確保しようと企図し、そしてこのゴールに向かって誤りなく進んで行った、というにあるが、この点には、多くの学者が強く異議をとなえている。Metternich の目的についての著者の解釈全体は、読者を誤解に導くおそれがあるといわれている。またその際、著者が彼のテーマを狭い範囲の史料を基礎にして論じていることも、一つの弱点とされている。しかしこの書物は、Metternich の外交的手腕をたくみに描写していることのために、また外交政策についての警句や達見を数多く含んでいることのために、依然として魅力があり、価値があることは、否定できない。

Paul W. Schroeder, *Metternich's Diplomacy at Its Zenith, 1820-1823* (Austin, Tex.: University of Texas Press, 1962)

は、ウィーン会議後の1820年から1823年にかけての革命と会議の危機的な時期における Metternich の外交を、主としてオーストリアの公文書史料にもとづいて新しく評価しようとしたものであるが、信頼に値する著作で、細かな研究と手がたい思考とが、明快な説明と結びあわされている。

Paul R. Sweet, *Frederic von Gentz: Defender of the Old Order* (Madison, Wisc.: University of Wisconsin Press, 1941)

は、徹底的な苦心の研究に機知と才気をおりまぜた第一級の業績で、アメリカの歴史家の手になる伝記のうち、最もすぐれたものといわれている。著作家および人間としての Gentz についての Sweet の分析は見事であり、彼は Gentz の多くの欠点——不規則な個人生活、財政上の不正行為、いくらかの知的な不誠実など——にきびしい批判を加えながらも、Gentz を、印象的な成長をとげた思想家として同情的に描いている。Gentz は人間として時にはいやしむべきもの、またいささかばかげたものであったかもしれぬが、愚鈍

な、平凡な人物ではけっしてなかったし、空論家や狂信家でもなかった、というのが、著者の主張である。Gentz の時代のオーストリアの政治や外交についても多くの知識を与えてくれるし、ある場合——たとえば1825年のギリシア問題など——には、きわめてすぐれた解釈を示している。しかし、当時の一般的な思想と社会のなかへ Gentz を統合するという点では、おそらくそれほど成功しているとはいえない。

Arthur Herman, *Metternich* (New York : Century, 1932)

は、ふれるだけの価値はあるが、あまりにも Srbik の書物に依存しすぎている。

Helene du Coudray, *Metternich* (New Haven, Conn. : Yale University Press, 1936)

も、ここに取りあげるに値する、周到な伝記であるが、大して独創的ではなく、Metternich に好意的でありすぎるので、人をしばしば誤解に導くおそれがある。

Peter Viereck, *Conservatism Revisited* (New York : Scribner's, 1949)

は、新保守主義の政治哲学の立場に立って書かれた Metternich 論で、挑発的な試論ではあるが、ほとんどしっかりした研究を基礎にしていけないので、Metternich の政治体制の分析としては大した価値がなく、事実についての誤りも少なくない。

外交史以外の領域にも、アメリカの学者の注意は向けられ、数々の業績を生みだしてきた。

Walter, C. Langsam, *The Napoleonic Wars and German Nationalism in Austria* (New York : Columbia University Press, 1930)

は、1808—9年および1813—14年の蜂起のさいにみられたオーストリア＝ドイツ人の愛国的・民族主義的宣伝の多くの例をあげ、有益な知識を与えている。しかし著者は、民族主義運動の立ちいった分析や、それが実際にどの程度まで進んだかの確かめを、ほとんど行っていないので、議論が十分説得的に展開されていない。

R. John Rath, *The Fall of the Napoleonic Kingdom of Italy* (1814) (New York : Columbia University Press, 1941)

は、公文書をもとにした周到な専門的研究で、Lombardy-Venetia におけるオーストリア支配の回復について、多くの知識を提供している。この書物は、論旨を概括的にはっきり示すことをほとんどしないで、細部のくわしい叙述にもっぱら力を注いでいるが、論争的になっている多くの点に、光を投じている。たとえば Rath は、オーストリアの北イタリア接收は、ある地方では実際に歓迎され、他の大抵の地方では受動的に受け入れられたこと、またオーストリアが Lombardy の管理をふたたび始めたのは、ほとんど完全に戦略的および対外的な諸理由のためであり、本当はいやいやながら行なわれたのだということを示している。また著者がわずかながら一般的結論を出している場合には、——たとえば、北イタリアにオーストリア恐怖病が発生したことについては、経済的な要素よりも心理的・社会的な要素の方がはるかに重要な関係をもっていたという見解——それは、はなはだ堅実であるように思われる。

Arthur G. Haas, *Metternich, Reorganization and Nationality, 1813-1818* (Wiesbaden : Franz Steiner Verlag, 1963)

アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況

は、Metternich の国内政策にかんする非常に有益な著作で、注意ぶかい研究を基礎にして、次のように論じている。当時 Metternich は、民族的基礎のうえに王国を再編成しようとする計画をもっており、これにもとづいて民族的自治を与えていたら、Italy 人および南スラヴ人の民族的な不満を先制することができたかもしれない。しかしこれらの計画は、Franz I によってくじかれてだめになってしまった、と。

Jerome Blum, *Noble Landowners and Agriculture in Austria, 1815-1848* (Baltimore, Md. : Johns Hopkins University Press, 1948)

は、合衆国で使うことのできる印刷された史料を良心的に利用した、刺戟的ではないがしっかりした研究で、オーストリアの農業改革の後半の段階をとりあげたものである。著者は、政府がなぜ最終的に Robot (賦役) 制度を廃止したかという点ではなくて、むしろ貴族的地主自身がなぜ Robot の廃止におとなしく同意し、自分自身のためにそれを唱導さえしたかという点を説明しているのであって、地主貴族は新しい資本家的精神に促されて、かれらに望ましい形の農民改革を説いてまわるようになり、ついにそれを獲得するに至った。というのが、著者の主要な論旨である。その改革とは、補償をとまなう、所有者のための Robot の廃止だったのである。ただ1846年の Galicia の暴動の取り扱い方は、人をあやまらせるおそれがあると批判されている。

Kent Roberts Greenfield, *Economics and Liberalism in the Risorgimento: a Study of Nationalism in Lombardy, 1814-1848* (Baltimore, Md. : Johns Hopkins University Press, 1934)

は、ハプスブルク家支配下の Lombardia の経済的発展にかんする、主要な古典的研究である。北イタリアにおけるオーストリア支配の長所——平和、規律正しさ、合法主義など——そのものが、経済的発展を進め、ミドルクラスのナショナリズムを高揚させたが、このナショナリズムは、オーストリアの統治を特徴づけるくどい集権的絶対主義と次第に両立しえなくなり、こうしてオーストリアの不利益に転じていった。すなわち、北イタリアにおけるハプスブルク支配のもとで発展した繁栄そのものが、じつは、この地におけるオーストリアの地位をほりくずすのを助けた、という事情をはっきり示している点で、本書は特にすぐれた価値をもっている。

R. John Rath, *The Viennese Revolution of 1848* (Austin, Tex. : University of Texas Press, 1957)

は、1848年のオーストリア＝ハンガリーの革命にかんする、周到なすぐれた叙述であって、Colorado 大学の革命的パンフレットのコレクションを利用した、アメリカの学者による主要な貢献である。Rath は、1848年の自由主義的な目標にたいしては同情的であるが、みずからをだめにする革命の過剰にたいしては批判的であり、また、さまざまな自由主義者たちが、自己の信条がかれらの階級的ないし民族的利益を犠牲にするおそれがあると悟ったとき、自己の信条にどこまでも忠実であることを望まなかった点についても、批判的である。

Josephine C. Goldmark, *Pilgrims of 1848* (New Haven, Conn. : Yale University Press, 1930)

は、1848年のオーストリア革命の際に、著者の父 Joseph Goldmark が演じた役割についての、有益な回想録である。しかしこの書物の半分は、その後の合衆国における父の生活に捧げられている。

4) 1848年から1914年に至る時期の研究

この期間は、オーストリア＝ハンガリーにかんするアメリカの歴史記述にとっては、もっともみのり豊かな時期である。まず、この時期を取りあつた書物のなかで、次の三つの著作が、基本的な重要性をもって、だんぜん高くそびえている。その第一は、

Oscar Jászi, *The Dissolution of the Habsburg Monarchy* (Chicago : University of Chicago Press, 1929)

である。本書はいまなおオーストリア帝国の衰亡にかんするもっとも読みの深い、もっとも重要な著作の一つとされており、数十年にわたる著者の学殖の所産として、高く評価されている。しかし公刊されてからすでに40年近くたっており、また两大戦間の時期に書かれたものであるから、こんにちの戦後の時代の学者からは、いろんな批評をうけており、また著者の立場の党派性——よい意味のものだが——も指摘されている。たとえば Jászi は、帝国の衰亡は一つの有機的な不可避の発展であったというテーゼを強く支持するために、大衆の不活発や、多くの人々の王国にたいする忠誠を低く見積りすぎている傾きがあり、また第一次大戦および戦後の時代の憎悪のあるものを戦前の時代に投げかえして理解している傾向がある、といわれている。また、Joseph II の改革の革命的・人道主義的な性格が強調されすぎているし、Metternich—Franz 体制がきびしく非難されすぎている、ともいわれている。さらに、Schwarzenberg や Bach の“ドイツ化的”中央集権主義を、本質的には Metternich 政策の継続とみている点で、Jászi はたしかに誤まっているし、またハプスブルク家の対外政策——特に1914年以前のそれ——についての彼の解釈は、全体としてきびしすぎるように思われる。Nationalism が本質的に自由主義的であるという著者の信念には、異議をさしはさむ余地があるし、また、オーストリアにおける民族的覚醒の過程はそれ自体遠心的な力だったのではなくて、ドイツ人およびマジャール人の支配権にたいする反動としてそうなったにすぎないという彼の確信にも、完全に同意するわけにはいかない。しかしこれらの難点にもかかわらず、この書物は非常にたくさんの妥当な概括と深い洞察とを含んでおり、特に、王国内の社会経済的事情についての議論は、まことに鋭いものがある。要するにこの著作は、多くの学識と叡智と情熱を伴っているので、ハプスブルク帝国史の研究には依然欠くことのできない書物である。

これと並んで重要なものは、

Robert A. Kann, *The Multinational Empire : Nationalism and National Reform in the Habsburg Monarchy, 1848-1918* (2 vols., New York : Columbia University Press, 1950)

で、この書物は、ハプスブルク帝国の最大のそしてもっとも複雑な問題である民族問題について、他のあらゆる書物を凌駕する、もっともすぐれた大作であり、ハプスブルク帝

国のすべての研究者が必ず一度は通過しなければならない、基本的な著作である。本書は、十分な研究としっかりした推論のうえに立ち、叙述は注意深く控え目に行なわれているので、読むことは容易ではないし、要約することもむずかしい。しかし Kann の民族問題にかんする一般の見解は、温和な現実主義的 pessimism のそれであるといつてよい。Kann によれば、民族問題解決のための一番よい機会、1849年に失われた。そして1867年のアウスグライヒは、ハプスブルク帝国の将来にたいして一つの重大な抵当権を設定したものであったが、しかしその時でも、ドイツ人のみせかけの自由主義とマジャール人のショヴィニズムにもかかわらず、また一切の改革の提案のなかには大きな理論的・实际的困難がふくまれていたとはいいいながら、有益な変更のためのいろんな機会、まだ残っていた。ただし、これらの機会、時がたつにつれて絶え間なく減少していったのである。したがって Kann は、オーストリアには失われるべき機会がまったくなかったから、オーストリアは改革のための機会を失うこともなかったのだ、という A. J. P. Taylor の意見には、同意することをこぼんでいるが、これは正当であると思われる。

Kann, *The Habsburg Monarchy, a Study in Integration and Disintegration* (New York : Frederic A. Praeger, 1957)

この書物は、民族の統合と分解という基本的な問題を、前著のなかの材料のあるものを利用して、政治学のフレームのなかで一般的な形で取りあつたもので、みのり豊かな成果をあげている。本書のなかで特に興味深く思われるのは、1) ハプスブルク帝国の末期には、自由放任政策 (fortwursteln, 拙い仕事をやり続ける) の方が、急進的な改革よりも実際にはいっそう安全であり賢明であったという論旨と、2) いったん世界大戦が始まったら、帝国は勝つか負けるかいずれかによって救われることができたかもしれぬという意見を、Kann がまったく拒否していることと、3) 帝国は、人種的・民族的な境界をこえた超民族的な英雄を出現させることができなかった——これは、Jászi も強調している点である——という議論である。

1848年から1914年に至る時期をあつかった第三の基本的な著作は、

Arthur J. May, *The Hapsburg Monarchy, 1867-1914* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1951)

である。この書物は、アウスグライヒから第一次大戦勃発に至る時期の概説として、まことにすぐれた書物であり、バランスの非常によくとれた、広範な学識のうえに立つ公平な総合であつて、英語で書かれたもののなかではもちろん、あらゆる国語で書かれたもののなかで、おそらく最上のものであるといわれている。この書物の取りあつかう範囲は広いが、特に力点がおかれているのは、対外政策、諸民族相互間の争い、社会生活や習慣の叙述であり、その反面、商業の発展や軍事的な事柄は多少軽視されているようにみえる。本書は正確さ、明快さ、構成のよさ、客観性など、あらゆる必要な長所を備えているが、ただ一つ偏向とみられるものがあるとすれば、オーストリアの外交政策についての好意的な見解と、歴史的なオーストリアにたいする同情であるが、このような偏向は、いまではむしろ健全であり、正当であると考えられている。なお、ついでながら、

Hans Kohn, *The Habsburg Empire, 1804-1918* (Princeton : Von Nostrand, 1961)

は、有益な入門的概観である。

これらの主要な総合的著作の背後に、多くの専門的研究があるが、それらのなかでは、ここでもまた外交史にかんするものが支配的である。まず1850年後のオーストリア外交政策の不幸な時期については、

Charles W. Hallberg, *Franz Joseph and Napoleon III, 1852-1864* (New York: Bookman Associates, 1955)

があり、クリミア戦争、イタリア戦争およびそれらの余波をめぐって、オーストリアとフランスの関係にかんするすぐれた、信頼のおける研究を提供している。本書は、オーストリアおよびフランス、特に前者の公文書史料を主として利用しており、事態の経過に即して忠実に、客観的に叙述を進めているが、政策の動機や政策をめぐる周囲の事情は、深く掘り下げられていない。

C. W. Clark, *Franz Joseph and Bismarck* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1934)

は、このテーマにかんする膨大な文献のなかで、いまでも基本的なものとされているが、Hallbergの書物とは対比的に、Bismarck, Franz Joseph, Biegeleben, Rechberg, Esterházy 其他の人々の思想や意図を非常に深くさぐっており、とりわけ1866年の戦争の起原については、現存の諸研究のうちでもっともよいものの一つといわれている。ただし、ClarkはBismarckの意図について、彼はオーストリアとの戦争を予見して1864年から引続き慎重にその戦争を計画していた、そしてGastein協約は作戦的行動のくりのべにすぎなかった、と信じているが、この点は多くの学者の反対をこうむっている。しかし、Franz Josephの悲劇は、彼が普通の人間であって、その普通人が天才との争闘に投げこまれた点にあるというClarkの結論は、まことに妥当である。

ドイツにおけるオーストリアとプロイセンの間の覇権の争いについては、

Lawrence D. Steefel, *The Schleswig-Holstein Question* (Cambridge Mass.: Harvard University Press, 1934)

も、学問的な綿密な研究だが、プロイセンにより多く注意を集中し、オーストリアの政策にはそれほど注意をはらっていない。Clarkとはちがって、Steefelは、結論をひきだしたり、だれかに責任を課したりすることを、好んでいないようにみえる。

Margaret Sterne, *Frankfurt im Brennpunkte der preussisch-österreichischen Auseinandersetzung 1865-1866* (Frankfurt: Waldemar Kramer, 1955)

は、1866年のプロイセンとオーストリアの衝突の焦点であるFrankfurtを、適切に取りあつかっている。

T. W. Riker, *The Making of Roumania* (London: Oxford University Press, 1931)

は、1856年から1866年に至る時期の、モルダヴィア・ワラキア二公国と協調外交についての基本的業績で、オーストリアの政策に大きな注意をはらっている。もちろんオーストリアの政府は常に防衛的で、モルダヴィアとワラキアの解放と統一に反対している。著者はルーマニアの民族的な統一を当然のことと考えているので、オーストリアの立場の弁護

論は、さっと片付けられているように見える。

1875—1878年のバルカンの危機については、二つの主要な外交史的研究があって、豊富な文献の一部を形づくっている。

David Harris, *A Diplomatic History of the Balkan Crisis of 1876-1878: the First Year* (Stanford, Calif. : Stanford University Press, 1936)

George H. Rupp, *A Wavering Friendship: Russia and Austria, 1876-1878* (Cambridge, Mass. : Harvard University Press, 1941)

この二冊は、長期にわたる詳細な専門的研究で、1870年代のオーストリアの政策に光を投げかけているが、両者は、史料・主題・一般的見解にかんして、多くの点で共通している。著者はともに、イギリスとオーストリアの公文書をつかっており、Rupp はそれに加えて、ロシアとマジャールの印刷された史料を利用している。Harris の著作の方が叙述はすぐれているが、Rupp の方がカバーする範囲は広い。双方とも Andrassy 時代のオーストリアの政策にはかなり好意的な判定を与え、その政策を、基本的にはおだやかな、首尾一貫した、誠実なものとして見ており、事実 Rupp は、Reichstadt 協定を、Andrassy が1871年以後追求してきた Gorchakov との協力政策の継続にはかならなかつたと論じている。したがって、双方の書物において、他の国々（ロシア・イギリス）の政策は、オーストリアの政策よりもいっそうきびしい評価を与えられている。Rupp によれば、ロシアがけっきよく困難と失敗に逢着したのは、主としてロシア自身のためらいと誤りによるものであり、一方 Harris は、Disraeli と Derby の全く消極的、妨害的、非現実的な政策にたいして、非常に説得的な反対論を展開している。両書ともに、ベルリン会議およびオーストリアにとって重大な段階である Bosnia-Hercegovina 占領の手前で終わっている。

次に、第一次世界大戦前の宿命的な時代におけるオーストリアの外交政策も、アメリカの学者の強い関心をよび、若干の基本的な研究が生まれている。

O. H. Wedel, *Austro-German Diplomatic Relations, 1908-1914* (Stanford, Calif. : Stanford University Press, 1932)

は、その当時においてはしっかりした周到な研究であったが、いまではかなりのりこえられている部分がある。しかし、なお立派な専門的研究であるといつてよい。Wedel は、主として Hoover Library の史料をつかって、1812年から翌13年にかけてバルカンにおけるオーストリアの地位が絶望的に悪化してゆく様子を生き生きと描き、オーストリアは早くも1914年前に、ロシアとの重大な外交上の争いを、取りかえしのつかぬような形で失ってしまった、と結論している。なお著者は付随的に、ドイツの大きな誤りは、滅びかけている仲間に自分を結びつけていた点にある、と論じているが、これは妥当な意見とは考えられない。

Bernadotte Schmitt, *The Annexation of Bosnia, 1908-1909* (Cambridge, England : University Press, 1937)

は、海外で出版されたものであるが、今なおこの問題についての標準的な著作の一つである。

E. C. Helmreich, *The Diplomacy of the Balkan Wars, 1912-1913* (Cambridge, Mass. :

Harvard University Press, 1938)

も、発行年代はかなり古いが、新しい史料の光をあびて改訂される必要はほとんどなく、いまなお欠くこのできないものとされている。本書はオーストリアの政策を十分にかつ公平に取りあつかってはいるが、主たる力点は、バルカン諸国およびオーストリア以外の列強の政策におかれている。

Wayne S. Vucinich, *Serbia between East and West : the Events of 1903-1908* (Stanford, Calif. : Stanford University Press, 1954)

は、Serbia 側の事情、特に関税・貿易問題およびその政治的意味について、詳しく語っており、非常に有益である。しかし、オーストリアの政策を、確固たる攻撃的帝国主義の政策とする彼の見解は、問題にする余地がある。

アメリカの歴史家はまた、特に第二次世界大戦以来、戦前のハプスブルク王国の他のもろもろの側面にたいしても、注意をはらってきている。

Adolf Schwarzenberg, *Prince Felix zu Schwarzenberg, Prime Minister of Austria, 1848-1852* (New York : Columbia University Press, 1946)

は、著者の縁つづきにあたる Schwarzenberg の伝記であるというよりは、むしろ Schwarzenberg 内閣時代のオーストリアの歴史であり、国内の諸事件およびドイツ問題を中心にしている。この書物は、現存の印刷された史料をもとにして、よく書かれており、興味深く、また、対象の扱い方もかなり客観的で、特に賛美しすぎているわけではない。しかしこの書物はなんら新しいものを含んでいないし、Schwarzenberg について疑わしい点は、可能な限りいつも善意に解されている。また二、三のひどい誤りがあり、反イギリス的な偏見があちこちに散見される。

オーストリアの軍事史にかんする研究は未開拓の分野だが、ここでの唯一の著作は、Gordon Craig, *The Battle of Königgrätz* (Philadelphia : Lippincott, 1964)

で、公刊されている現存の史料を徹底的に利用して書かれた、思慮深い立派な叙述である。1866年の戦争についてなにか目新しい事実を示そうとしたのではなく、魅力的な筆致で、信頼のおける説明を読者に与えている。そして、論争の的になっている諸点を、人を納得させるやり方を取りあつかっている。B. H. Liddell-Hart のような批評家からきびしい非難をあびている Moltke の戦略について、著者は弁護的な立場をとっている。一方、プロイセンの勝利の理由にかんしては、Craig は、Oskar Regele よりも Heinrich Friedjung の見解にいっそう近い態度をとっている。すなわち、戦争を決定したものは、全体にわたるプロイセンの優越であって、もっぱら針打銃だったわけではない、と述べている。

Stanley B. Kimball, *Czech Nationalism : a Study of the National Theatre Movement, 1845-1883* (Urbana, Ill. : University of Illinois Press, 1964)

は、チェヒおよびオーストリアの公文書を基にした、多少散文的なところはあがあるが、真面目な、そして詳細な、価値の高い特殊研究である。本書の主要な論旨は、チェヒの国民劇場 National Theatre は、王室・国家・貴族の支援によってではなく、むしろ一般の寄附によって建てられたものであり、チェヒ民族の文化的・政治的ルネサンスの真の表現で

アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況

あり、またその伝達物であった、という点にある。この著作はその方向においてチェヒ人に好意的であり、反ドイツ人的ではあるが、素朴な一面的結語を除いては、異議をさしはさむ余地があるほどチェヒ人びいきというわけではない。

Peter F. Sugar, *The Industrialization of Bosnia-Hercegovina, 1878-1918* (Seattle : University of Washington Press, 1964)

は、オーストリア政府の政策と経済的発展の間関係を取りあつた最近の研究で、非常に重要な、新分野を開拓した労作である。Sarajevo, Wien, Paris, London の記録保管所での徹底的な研究と注意深い分析のうえに立って、この書物は、オーストリア＝ハンガリー支配下のこの地の経済的発展のあらゆる側面——農業・重＝軽工業・鉄道・通信・労働組織など——について、評価を行なっている。本書の叙述は、事実在即して詳細であるが、随処に有益な要約や意見がちりばめられている。著者は、問題を未解決のままに残したり、推測に訴えたりしている場合もあるが、これは、信頼できる史料が乏しいためであって、研究の不足のためではない。Sugar の推論は非常に注意深く控目に行なわれているので、簡単に概括することはむずかしいが、要するに著者は、オーストリアの記録についてかなり好意的な判断を下している。すなわち、著者によれば、オーストリアの目標はつねに正しかったが、その方法がしばしば間違っていたために、そうした事情のもとで当然あげられるはずの成果があがらなかったのである。だが、オーストリアの“経済発展”政策はけっして一様に賢明であり成功的であったとはいえないにしても、政府の処置がまったくとられなかった場合よりは、結果はよかった、と述べている。

William A. Jenks, *The Austrian Electoral Reform of 1907* (New York : Columbia University Press, 1950)

および

William A. Jenks, *Vienna and the Young Hitler* (New York : Columbia University Press, 1960)

の二つの著作は、第一次大戦前のオーストリアの首都の政治と社会を取りあつたものである。前者は、すぐれた、しっかりした、そして有益な改革の分析で、主として国会 Reichsrat における論争を要約したものである。叙述はどちらかといえば単調で、結論もあまり明快ではなく、格別目新しい点もみられない。Jenks は、Franz Joseph 帝が最初改革に反対の態度をとりながらやがてその弁護に転じた理由を、あいまいに残している一方、改革法案が、多くのグループのわるい妥協という形でのみ受け入れられた事情を、示している。

アメリカの学者によるオーストリア社会史の研究は数少ないが、後者はそのうちのもっとも重要なものの一つである。Jenks は本書で、ふるい Wien の社会事情や政治や文化の雰囲気、それらが Hitler に影響を及ぼした当時のそのままの姿で、呼び起こそうとしているが、この企図は部分的にしか成功していない。なぜなら、Hitler はこの研究の「理由」であるよりはむしろ「口実」であって、Jenks が描いている、Hitler の生活と Wien の事情との関係は、しばしば推測にもとづいているからである。したがって、Wien 時代の Hitler について知るためには、他の著作の方が本書よりももっと役に立つが、しかし、

第一次大戦前の Wien の雰囲気や社会事情を描写しようとする著者の意図は、かなり成功している。本書のうちで最もすぐれている部分は、オーストリアの反ユダヤ主義、Karl Lueger の政治および Wien の貧民の生活状態の記述的分析である。

Michael B. Petrovich, *The Emergence of Russian Panslavism, 1856-1870* (New York : Columbia University Press, 1956)

は、初期の汎スラヴ主義にかんするすぐれた研究で、オーストリア＝スラヴ人のロシアおよび汎スラヴ主義にたいする関係、特に1867年の Moscow のスラヴ会議においてのこの関係について、かなりの知識を与えてくれる。

Andrew G. Whiteside, *Austrian National Socialism before 1918* (The Hague : Martinus Nijhoff, 1962)

は、Böhmen における政党および政治的イデオロギーの発生を取りあつかっているだけでなく、また、Böhmen におけるドイツ人とチェヒ人の対抗の、比較的のちの全過程を取りあつかった重要な著作である。著者は本書で、Böhmen におけるドイツ人とチェヒ人との対抗は、ドイツ人の優勢な工業地域にチェヒ人が地方から移住してきたためにおこった経済的競争によって、大いに高められたという、説得力のある明快な論旨を示している。

Henry Cord Meyer, *Mitteleuropa in German Thought and Action, 1815-1945* (The Hague : Martinus Nijhoff, 1955)

は、主として「思想」の歴史であるが、鋭い研究であって、従来の見解に修正を加える若干の重要な結論を提示している。Meyer は主にドイツ帝国における《Mitteleuropa》思想の支持者と帝政ドイツの政策とを取りあつかっているが、この思想のオーストリア的な根および、第一次世界大戦中のこの思想にたいするオーストリアの反応にも、注意を払っている。こんにち必要とされるものは、Meyer の研究に対応する研究、すなわち、スラヴ人の思想と行動にみられる《Mitteleuropa》についての研究である。

次にそれほど重要でないいくつかの研究をあげておこう。

Merle Curti, *Austria and the United States, 1848-1852* (Northampton, Mass. : Smith College Press, 1926)

は、1848年のオーストリア革命にたいするアメリカの政府と与論の反応を描いた、ちょっとした、しかし有益な専門的研究である。

Arthur J. May, *Contemporary American Opinion of the Mid-Century Revolutions in Central Europe* (Philadelphia : Westbook, 1927)

は、1848年のオーストリア革命の際、アメリカでは Kossuth にたいして、大きな、いつわりのない、まったく素朴な熱狂の浪が高まったこと、しかしその浪は、Kossuth がハンガリーの自由のためにアメリカ人から何事かを期待していることがわかったとき、急速に冷却したことを叙述している、有益な書物である。

Sister Claire Lynch, *The Diplomatic Mission of John Lothrop Motley to Austria, 1861-1867* (Washington D. C. : Catholic University Press, 1944)

は、月なみの論説で、Motley については若干の事柄を語っているが、オーストリアの

アメリカ合衆国におけるハプスブルク帝国史研究の近況

国内問題や外交問題については何事も語っていない。Motley はこれらの問題について、Wien に駐在した大抵のアメリカ使節にくらべて、偶然よく知っていただけに、このことは惜しまれる。

Benjamin J. Blied, *Austrian Aid to American Catholics, 1830–1860* (Milwaukee, Wisc. : B. J. Blied, 1944)

は、アメリカのドイツ移民の間でのオーストリア司祭たちの活動ぶりと、移民の間につくられた „オーストリア＝レオポルト協会” のことを叙述している。

5) 第一次世界大戦中のオーストリア史研究

この時期について、アメリカ人の手になる重要な著作がみられないのは、驚くべきことである。

Joachim Remak, *Sarajevo* (New York : Criterion Books, 1959)

は、この宿命的な陰謀についての、学問的であると同時に魅惑的でもある、もっとも新しい記述だが、オーストリアの政策よりもセルビアの政策の方に力点をおいている。

Thomas Čapek, *Origins of the Czechoslovak State* (New York : Revell, 1926)

は、適度に客観的であり、事実在即しているけれども、ささやかな書物なので、重要であるとはいにくい。

Bertia Harding, *Imperial Twilight : the Story of Karl and Zita of Hungary* (Indianapolis, Ind. : Bobbes Merrill, 1939)

は、仰々しく学者ぶったところのない、人の心をうつ、感傷的な伝記である。

6) ハプスブルク王国の崩壊と東・中欧における講和の決定にかんする研究

この問題については、たくさんの非常に重要なアメリカの文献がある。まずオーストリア共和国の起源について、

Nina Almond and Ralph H. Lutz (eds.), *The Treaty of St. Germain* (Stanford, Calif. : Stanford University Press, 1935)

は、講和交渉にかんする膨大な文書をうまく選んで集めたもので、批判的な注釈、すぐれた地図、有益な索引が完べきにつけられており、いまなお非常に便利である。偏見や傾向性はなんら看取されない。文書それ自体が、重苦しいけれども興味深い読物をなしている。

ハンガリーについては、

Francis Déak, *Hungary at the Paris Peace Conference* (New York : Columbia University Press, 1942)

があり、この書物は下記のような重大な欠陥をもってはいるが、もっともすぐれたものの一つで、著者はマジャー人であるけれども、民族主義的感情をしりぞけ、つとめて控え目であり、公平であろうとしている。しかし彼は、その研究を1918—1920年に限り、戦

前および戦争中のハンガリーの政策を考慮していないために、また、自分の仕事を、国境問題その他条約上の問題の純粋に法律上・外交上の研究に限っているために、チェヒ人・ルーマニア人・南スラヴ人の言い分を公平に取りあうことに失敗しているばかりでなく、さらに重要なことに、彼が正当にも不正であり実行不可能であると批評しているトリアノン条約の条項そのもののいっそう深い動機を明らかにすることができない。それにもかかわらず、回想録や連合側およびハンガリー側の公文書を基礎にした諸事件の叙述は、長期的価値をもつものであり、かれこれ 200 ページにわたる貴重な文書類が付録につけられているのも、便利である。

なお、主としてオーストリア＝ハンガリーをあつかったものではないが、最近数年間に第一次大戦中の外交およびパリ講和会議について多くのすぐれた研究があらわれ、オーストリア＝ハンガリーにかんしても、いろんな角度から光を与えている。

Victor S. Mamatey, *The United States and East Central Europe, 1914-1918* (Princeton, N. J. : Princeton University Press, 1957)

は、Habsburg 王国にたいするアメリカの政策の形成と発展を扱ったすぐれた研究で、亡命者グループのここかしこでの活動と、それがアメリカおよび連合側への外交に与えた衝撃についても、多くの知識を提供している。

Ivo J. Lederer, *Yugoslavia at the Paris Peace Conference* (New Haven, Conn. : Yale University Press, 1963)

は、ユーゴスラヴィアおよびイタリアの多くの未刊の史料をもとにした、立派な研究で、イタリアの政策についても、ユーゴスラヴィアの代表団の内部の対立についても、非常に教えるところが多い。しかし、Lederer はオーストリアについては、王国についても、共和国についても、ほとんどふれていないし、ふれられている場合にも、オーストリアはもっぱら外交の客体として扱われ、主体として取りあつかわれてはいない。

Dagmar H. Perman, *The Shaping of the Czechoslovak State* (Leiden : E. J. Brill, 1962)

は、チェコスロヴァキアと講和の決定にかんする、徹底的に研究された、非常にすぐれた専門的著作で、本書が重きをおいているのは、チェコの政治家と他の連合国政治家とがともにせまい選択の範囲内でいろいろ活動したこと、マサリックやベネシュのような自称温和派の人々が、民族主義の圧迫に悩まされたこと、またかれらの基礎にはペンミズムがあり、かれらは、新しい国家を苦しめる弱さと危険を知っていたこと、などである。

Sherman D. Spector, *Rumania at the Paris Peace Conference* (New York : Columbia University Press, 1962)

は、戦争中および戦後の Bratianu の政策にかんする魅力的な研究である。そして本書は、ルーマニアの目的を——そして同様に彼自身の個人的な目的を——促進させるために連合諸国間の不一致を利用することのできた彼の手腕とその誤りを、強調している。

Piotr S. Wandycz, *France and her Eastern Allies 1919-1925* (Minneapolis, Minn. : University of Minnesota Press, 1962)

も立派な研究だが、主として戦後の時期を取りあつかっている。

最後に、上述の Déak の著作および東ヨーロッパの講和決定にかんする最近の専門的諸研究を補足するものとして、次のすぐれた書物をあげておこう。

Alfred Low, *The Soviet Hungarian Republic and the Paris Peace Conference* (Philadelphia : American Philosophical Society, 1963)

これは、すぐれた良心的な研究にもとづいて、Béla Kun の統治と連合側との関係を簡潔に論じたもので、ほとんど新しい事実をつけ加えてはいないが、この問題について従来標準的とされていた著作 (Temperley, Nicolson, Déak のものなど) の意見に、有益な修正を加えている点で、注目に値する。すなわち著者は、ハンガリーの過激派にたいする恐怖が、パリでの連合側によるハンガリーの国境決定のうえにはたしたと思われる役割について、従来の神話と誇張を追いはらっている。著者の示すところによれば、連合側はポリシェヴィキのハンガリーとその明らかに攻撃的・革命的な目標になるほど当惑はしたが、しかしこのおそれは、領土問題の決定にはほとんど、ないしはまったく、影響を与えなかった。そのことでは、連合諸国間の不統一や、各種の領土問題委員会の間の調整の不足も、終局的な決定の際には、大した意味をもたなかった。領土問題の決定は、戦争の最後の段階の間に、すでに大体の輪廓ができていたし、幾分かはまた運の問題であった。あの最悪の不可避的な時勢のなかで、ハンガリーにとってすべては最悪の状態に向かったのである。——これが著者の論旨である。

結 語

以上わたしは、過去半世紀の間のハプスブルク帝国史にたいするアメリカの学問的貢献を、不十分ながら一通り概観したが、その結果いえることは、アメリカの学問的業績が質量ともに相当なものであり、多分オーストリアとドイツを除けば、他のどの国の業績にも劣らない重要なものと思われることである。しかも、その間、時代がくだるにつれて業績の数がふえ、現在では、以前にくらべてはるかに多くの学者がこの分野で活動し、広範囲のテーマと取り組み、こまかな問題に沈潜し、言葉も多くのものをこなすようになっていく。いうまでもなく、亡命学者がアメリカの学問的発展につくした貢献は大きいですが、いまではアメリカ土着の新しい学者も、たくさん現われている。

ところで、アメリカ学者の業績を概観してまず感じられることは、あらゆる領域と時代に均等に力が注がれているのではなく、18世紀後半以後の新しい時代に重点がおかれていること*、また特に外交史と政治史** とりわけ前者が優位を占めていることである。その理由として、Schroeder 教授は、最近の時代の外交史の分野では、研究のための史料がもっとも利用しやすいこと、これらの史料を取りあつかうのに必要な言葉が特殊なものでないこと、その土地の事情に深く精通していないという外国人のハンディキャップがそれほど大きな障害にならないために、一般に局外者も比較的親しみをもって気楽に仕事ができること、などの要素をあげている。しかし、なおそれほど研究が行なわれていない分野の

* アメリカで、中世史学者がなぜハプスブルク研究に手を染めなかったかは、不思議なことである。

**政治史・行政史(政党や政治的イデオロギーを含む)の分野でもかなり活発な活動が行なわれたが、ここでは特に最近の時代に集中していることはない。

なかには、外国人であることのハンディキャップが同じくそれほど大きな妨げにならないもの——たとえば経済史* や intellectual history など——があり、これらの分野では今後の研究の発展が期待されよう。しかしその反面、アメリカの研究が著しく欠けている領域のなかでも、たとえば地方史とかある種の制度の歴史などは、その土地の歴史家が大きな研究上の便宜をもち、またよい仕事をするのできるような分野であって、これらの領域では、アメリカの学者のそれほど大きな活動は期待できないのではなからうか。

次に、アメリカの研究を通じてみられる内容的な特色について、一言しておこう。アメリカは、ハプスブルク帝国の存立ないし崩壊によって直接致命的な影響をうけることがなかったため、アメリカの学者のハプスブルク帝国についての叙述は、概して客観的であり、偏見をまぬがれているとあってよい。ハプスブルク帝国史研究上の中心的諸問題、すなわち、帝国は存続すべきであったかどうかの問題、帝国の生存能力の問題、その使命の問題、有益な、時宜を得た改革の可能性があったかどうかの問題などについてみれば、アメリカの著作の一般的傾向は、歴史的なオーストリアおよびその諸問題にたいしては、どちらかといえばかなり同情的であるが、これらの問題をタイムリーに解決して帝国を救い、帝国を将来にとってよりよいものに変形しうる可能性があったかどうかについては、かなり懐疑的であるように見える。こんにち大抵のアメリカの歴史家は、オーストリアのリーダーシップの欠点や過失についてそれほどきびしく批判的ではなく、ちがった方策がとられたら実際上ちがった結果になったとは信じていないように思われる。この点で興味深いのは Peter F. Sugar, *The Nature of Non-Germanic Societies under Habsburg Rule* (Slavic Review, 1963)

という論文であって、彼はこのなかで、オーストリア＝ハンガリーにおける民主的な線に沿っての生産的な改革は、政府の政策やドイツ人・マジャール人の反対によって妨げられただけでなく、帝国の社会的構造そのもの——さまざまな民族の内部に、社会的断片化、階級分裂、政治的未経験、経済的後進性が存在したこと——によっても妨げられた、と論じている。要するに、王国は少なくともその終期には、まさにその基本的な国内問題が解決できなかったために存立することができたのであって、それゆえ、拙い仕事をやり続ける (fortwursteln) という政策がほとんどすべてのものにとって唯一の可能な選択になっていた、あるいは、不可能な選択をさける唯一の道になっていた、というパラドックスを認める点で、多くの学者は一致しているように思われる。

次に、ハプスブルク帝国史研究の方法やアプローチには、過去半世紀を通じて、決定的な変化は起こらなかったように見える。近年、心理学の理論を取り入れようとしたり、社会学・政治学・経済学などの技術を使おうとつとめたりする歴史家の数は、すこしずつ増えてきており、最近の研究のなかで次第に生産的な成果をあげはじめているけれども、しかしなおアメリカのハプスブルク帝国史研究の主流は、従来の歴史学の方法に沿って行われ続けているとあってよい。

アメリカにおけるハプスブルク帝国史研究の発展が、1) 世界的な規模でのこの分野の研

*社会経済史の分野は、一見アメリカの学者によってやや閑却されてきたように見えるが、質的水準の高さにおいて、またその意味の大きさにおいて注目すべきものがあることは、本文中で述べた通りである。

究の水準を引き上げるうえに重要な寄与を行ってきたこと、2) またそれが、アメリカの歴史家および関係領域の学者たちの視野をひろめ、洞察を深めるのに役立ってきたこと、はあらためていうまでもないが、最後にもっと深いところで、こんにちのアメリカでハプスブルク史研究はなぜこのようにさかんなのか、またその研究はこんにちのアメリカにどのような意味をもっているか、を考えてみたいと思う。

いまから50年前のアメリカ合衆国とオーストリアとを比較するとき、両者に共通な西欧的文化の遺産を別にすれば、両国は、将来の眺望という点について共有するものはほとんど何もなかった。前者の無制限な自信とオプティミスティックな自由の信念と、後者のあきらめた半ば宿命論的なペシミズム、一方の側における有望な繁栄や発展の見込と、他の側における不可避的な衰退とやがて訪れそうな破局のくらい予想、この対比はほとんど完璧なものであったといえよう。当時アメリカ人がオーストリアから学ぶことのできる唯一のものは、何をなすべきでないかという点の教訓しかなかったのである。

こんにち、世界の強国の地位にのぼったアメリカ合衆国と、50年前のハプスブルク王国との間の対比は、なお顕著なものがあるとはいえ、もはやそれほど完璧ではない。こんにちアメリカ合衆国が、黒人問題をかかえ、革命的な諸勢力にはげしく攻撃されつつ、秩序と安定を保持しようとする保守的な大国の地位にあることは、否定しがたい事実である。アメリカは、もはや究極の勝利と成功について、また富と勢力の永続的な増大について、以前よりも自信を失っており、自分たちの解決できない問題をかかえて生活することに精一杯であり、生き続けること、我慢することを勝利とみるほかない状態に、おいこまれている。このことは、アメリカ人が旧ハプスブルク王国を理解し、認識するうえで、以前よりもはるかに有利な状態にあることを意味している。ハプスブルク帝国の包蔵した諸問題と、そこにみられたさまざまな対応の仕方を正しく理解することは、こんにちのアメリカに多くの示唆を与えるものであり、このことが、こんにちのアメリカにおけるハプスブルク史研究の隆盛の根底に、潜在的な問題意識として流れていることは、否定できないように思われる。

この点との関連で、最近アメリカの歴史学界で、特に比較研究の分野を発展させることの必要がますます唱えられているのは、注目に値する。インディアナ会議における Schroeder 教授の意見を紹介すると、ある国の歴史における特殊な問題や展開を他の諸民族の類似した問題や展開と比較することは、古くから行なわれているあたり前の方法だが、大西洋をへだてたプランとしては、まだそれほどさかんに使われていない。特にアメリカとオーストリアの歴史の間では、このようなアプローチは行なわれなかった。表面的にみれば、両国の歴史にはほとんど共通な点はないようだが、すこし詳しくみれば、生産的な比較的考察の可能性は随所にあることがわかる。たとえば、アメリカの Civil War に続く Reconstruction の時代は、すでにあらゆる角度から取りあつかわれているが、他国の再建と比較する観点だけが欠けている。オーストリアも1848—49年に Civil War をもち、1849—59年に Reconstruction をもっている。両国の状況の間には明白な相違もあるが、同時にある種の似た点もある。こうした類似性は、比較研究の可能性を暗示する。アメリカの歴史家は、自国の歴史を研究する際に、オーストリア（その他のヨーロッパの国々）の歴

矢田俊隆

史にもっと注意を払った方がよい仕事ができるであろうし、その逆もまた正しい。そしてこの努力はおそらく幾多の新しい洞察、幅の広い見透し、種々の刺戟を与えるであろう。——以上が Schroeder 教授の見解である。われわれも、このような方向でのアメリカのハプスブルク帝国史研究には、今後大きな期待をかけることができよう。